
【研究論文】**『鳩の羽根』における神の啓示****Revelation of God in “Pigeon Feathers”**

山本 淳子
Junko YAMAMOTO

1. Unconscious Sinning –意図せぬ罪

アメリカの作家、ジョン・アップダイク（1932-2009）による *Self-selected Stories of John Updike*（日本題『アップダイク自選短編集』）に収められている *Pigeon Feathers*（日本題『鳩の羽根』）は、14歳の少年であるデイヴッドが「死」を意識するところから始まり、「生」を確信するところまでを描いたビルドゥングズロマン、つまり成長物語である。また、宗教的体験を通して神の啓示を確信するという一つのイニシエーション小説でもある。鳩を殺すという行為を通して少年がキリスト教への目覚めに到達するまでのいきさつが、少年の視点で描かれている。ドストエフスキーの「罪と罰」における意図的な罪 – Conscious sinning – つまり意図的に罪を犯していく主人公が、やがて覚醒し神からの救済に巡り会うという体験に通じるものが見える。意図的に悪を行うとまではいなくても、抵抗しない鳩を次から次へと撃ち殺すという行為は、一つの意図的な罪であろう。しかし少年は、その行為により、彼が宗教的体験をしているとは意識していない。意図せずに、神の啓示を確信したのである。ゆえに、この体験を Unconscious sinning 一意図せぬ罪と名付けることにする。

少年は、自分の存在が否定されるのではないかという恐怖を乗り越えるために鳩を撃ちまくる。殺生という神に対しては反逆と取れる行為を犯した主人公が、その行為を通して、心の内面と現実を一致させることができたのである。神の啓示を確信したその瞬間、神への信仰につなげることができた。これは単にデイヴィッドという一少年の個人的体験ではなく、自分自身で神を見つけるという、アメリカ個人主義の基づいた普遍的な宗教的体験と見なすことができよう。もともとヨーロッパの宗教観念を受け継ぎ、村がカトリックであるから自分も必然的にカトリックであるという周りに合わせるという従属的態度は、やがて自らが疑問を抱き、自分で神と向き合う、そこから個人の本当の信仰を見いだすという態度に変容していくというのが19世紀以降の実存主義であるが、この体験をアップダイクは少年デイヴィッドにさせたのである。

ウィリアム・ジェームズは1901年に「宗教的経験の諸相」の中でヨハネ福音書の「私の父の家には住むところがたくさんある」（14章2節）という一節を引きながら、

「われわれはそれぞれ、自らの力と信じるもの、自らの真の使命や召命とを感じるものに最もふさわしい種類の宗教と、最もふさわしい量の聖者的資質 (saintship) とを、自分自身のために見つけ出

さねばならない」

としている。その過程で、罪深い行動を犯す例がいくつも提示されている。生に対して全身全霊で向き合う姿勢が宗教であるとジェームズは述べるが、その姿勢を二分するのが「健やかな心」と「病める魂」という対概念であると堀（2002）は述べている。後者の「病める魂」とは、「圧倒的な不幸の存在感に震え、そのような不幸の根源には人間の力では取り除くことができない悪や罪がとぐろを巻いていると考える人たち」の考えであるとした。この「病める魂」を持つ者は悪を意識し、みずから罪を犯しながら信仰にたどり着くしか、救いを得ることができないことを示しているのではないだろうか。

この彼のsainthoodという概念が*Pigeon Feathers*にも流れていると考察できる。少年は人に頼ることなく自分自身の力で、自分自身のために神の存在を発見し、sainthoodを発揮する姿を示している。その過程で、少年も「鳩を殺す」という罪を意識し、目覚めに到達するのである。

堀（2002）は「宗教的経験の諸相」が書かれた時代は「健やかな心の宗教」が隆盛を極める一方で、父祖の信仰への回帰を訴える信仰復興運動が第三次の高波を迎えていた時」であると指摘している。アップダイクはこの宗教復興の運動にどのように寄与しようとしたのか。「病める魂」がUnconscious sinningという宗教的体験を通して救われたという仮説に則り、アップダイクが提起した問題について考察する。

2. アメリカにおける宗教的体験

沖永（1997）は、「宗教的経験の諸相」をふまえ、宗教体験を単なる心理現象ではなく、どこまで宗教的真理の現れと認めてよいのか、その境界について考察した。沖永はジェームズの生きていた19世紀から20世紀の初頭というのは、伝統的な宗教観念と、科学的な唯物論とが真っ向から対峙した特殊な時代だったとしている。

アメリカン・ルネッサンスを代表する文学者、思想家、かつ宗教家であるであるエマソン（1841）は、その伝統的な宗教観念をやぶり、宗教における個人主義の姿勢をアメリカに再確認させることになった。著書、*セルフリライアンス*の中で、彼は教会への不信感をあらわにしている。信仰は、既存のものではなく、また先人、教会の牧師らから与えられるものではなく、自らが実際の体験を通して自分で見つけるもので、そうすることで神の啓示は自分のものになると主張している。

「教会の古く尊い教義を持ち出しては私を悩ませていたある立派な助言者」に次のように問いかけている。

「私が完全に内面だけに従って生きていれば、一体伝統の神聖さなどに私がどんなかわりがありましょう」

亀井（1997）によると、エマソンは人間の精神や感情の解放は、内省的につまり光の反射のように自己に送って探求しようとした、としている。エマソンのいうように、自己を徹底的に深めて表現する、人一人一人に絶対的な尊厳を持たせるという個人主義の考え方は、非常にアメリカ的な思想である、と述べている。アップダイクは、このエマソンの考え方に見られる個人主義の考え方を

なぞり、少年に自ら神の啓示を見いださせたのであろう。

鳩の羽根が書かれた頃、アメリカでは宇宙をニューフロンティアとした宇宙開発競争がソビエトと繰り広げられていた。1957年に、ソ連は人類史上初の人工衛星スプートニクの打ち上げに成功し、1961年には、有人宇宙飛行に成功する。このときガガーリンが「私の周りに神は見えない」という内容のことを言い、宗教国アメリカの怒りを買った。社会主義で、無神論国家のソ連が資本主義で有神論国家アメリカを挑発したととったのである。このような状況で、アメリカは国家の威信をかけて、アポロ計画を実行する。映画化もされたトム・ウルフのザ・ライトスタッフ（1979）において、ソ連との宇宙開発競争で活躍したライトスタッフ（己にしかない正しい資質）はアメリカ国民の理想的存在として描かれた。強い愛国心を持つと同時に、家族を愛し、宗教心も深い彼らは、「神は見えない」としたソビエトにまっ向から対決するヒーロー的存在となった。以降、宇宙飛行士にはライトスタッフのイメージが伴うことになる。ライトスタッフに見られるのは最先端技術の世界のなかで繰り広げられる宗教的体験であり「自らが神の存在を見つける」というアメリカ的な啓示が示されていると考える。アップダイクも、同じように自然界における美に心を打たれる少年を通して宗教に目覚めるといふ、宗教的体験を描いている。ガガーリンの言葉に怒ったアメリカ人の思いを代弁するかのように、プロテスタントとして「やっぱり神様は存在する」という結論をこの作品で示したのである。キリスト教国家アメリカにおいては、宗教的な理由から進化論を否定する者が多く、キリスト教系宗教団体が「進化論を教えるな」と州の教育委員会を相手取り論争を起こした例があるほどである（池上、2009）。

ローマ・カトリックは教会を通じて信仰が行われる一方で、プロテスタントは、信仰者個人が神へ直接信仰する行為を指す。この作品の主人公、デイヴィッドも、自らの力で神の存在を確信したが、これはプロテスタント的な結末である。また、そこに至る道のりは、到底、平坦なものではなかったのである。どのような、道のりであったのか。彼の、信仰に至るまでの迷いや不安といった宗教的体験をさらに掘り下げて考えたい。

3. 宗教的葛藤

*Pigeon Feathers*の結末部分にある、デイヴィッドが、神が自らの創造の天地をすべてうちこわされるはずがない、と信じた部分について、アップダイク自身が次のように語っている。「63歳の年齢になった今でも、わたしはこの小説の最後の一説に書いた見方と確信をあれ以上に書くことはできないと考えている」（アップダイク、1995）

Harper（1969）によると、この小説の主題は、少年が始めて抱く宗教的疑問と神の創造行為に対する安心感だとある。大江（1985）がアップダイクは、フィリップロスと並んで現在アメリカ人がどうなっているかを理解し定義しようとしている作家であり、またこの作家の描く人間は、いつも非常に善良で、良心的で、神経質で、変化するアメリカ社会の最前線が生み出している人間である、と評している。現代の典型的なアメリカ社会やアメリカ人を描くアップダイクの人気の高さの所以であらう。

この作品は、1962年、ジョン・アップダイクが32歳のときに書かれた作品で、鈴江（2003）によると自伝的要素が濃く現れている小説であるとしている。岩元（1992）もこの小説を「作者自身の少年期を題材として書かれた短編の傑作」としている。アップダイクの実際の家族状況（祖母がパーキンソン病であること）、引越した時期、場所などが、ちょうど符号する。「鳩の羽根」に流れている宗教観・生と死に対する考え方はジョン・アップダイク少年自身が感じたことをモチーフにしていることがわかる。本格的に信仰の道に進む前の、迷いや疑いを乗り越え神の啓示を確認する少年は、アップダイク自身であり、それは大江が説明するとおり、典型的で良心的なアメリカ人像なのであると考える。

この作品を始め、アップダイクによる代表的な哲学的な小説は死を扱ったものが多い。宮本(1977)は「日常性をとりあげ、それを詩の世界に高めながら、どちらかといえばpessimisticな人生観を背後に力強く書き込んでいる」と*Pigeon Feathers*を高く評価している。このpessimisticを単に「悲観的」と訳すことはためられる。物事を楽観的に受け止めるのではなく、常に最悪の事態－「死」を意識した人生観を描いているのだと解釈できる。そしてこれは、宗教にのっとった人生観である。

キリスト教国家において、この作品が広く受け入れられた理由の一つとして、この作品が宗教色を色濃く出していることがあげられる。

本格的信仰に至るまでに避けては通れない神の存在に対する疑念は、彼の引越してから始まる。日曜学校での教えを守ってきたデイヴィッドは幼いときに聖書のなかの神都市部から田舎へ引越してきて、慣れない家や土地に違和感を覚える。身の置き所を決められない不安感とともに、自己存在の危機という強迫観念に取りつかれる。安住の場を奪われた少年にとっての一つのトラウマである。これまで慣れ親しんだ世界からの決別を意味し、初めて「喪失感」を味わう。これは彼の内面のイノセントな世界が崩れることも意味する。それで自分を落ち着かせることができない少年は本を整理して気を紛らわせることにする。そこで、彼はH. G. Wells (1920) による *The Outline of History* を手に取る。少年はこの本の、イエス・キリストに関する記述を読んだときに、これまで信じていた神に対して抱いていた幼年期の世界を破壊される。それ以降、彼は「死」のイメージに対する恐怖心を膨らませていく。このH.G. ウェルズのイエス像はheと小文字で書かれ、ローマ帝国の小さな植民地に出現した放浪者として描写されていた。創世記を信じ、国全体が神のもとに創られたことを信じる少年が抱いていた神性が、この本では真っ向から否定された。これが彼の信仰心が大きく揺れ動かされた瞬間である。

作家のJohn Updike自身がこの部分を「宗教への疑いというトラウマ」と表現している(アップダイク、1995)。彼は、何とか反論の糸口を探ろうとするが失敗に終わる。少年は信じていた神の神性が否定され、神の創造物と信じていた自分の存在自体が無くなるかもしれないという恐怖を味わう。このトラウマによって深く傷ついた少年は、やがて死への恐怖と不安に悩むことになる。

家族に愛されながらも、神性について考えるうちに自己喪失に陥り、少年はふさぎこんでしまう。本格的な信仰に至るまでに思春期の少年ならではの悩みに押しつぶされそうになっていると考えられる。その様子を心配する両親からの助言は救いにはならない。しかし家族の存在は彼の自立には

欠かせないものである。というのは、家族の間のいさかいは、間違いなく、デイヴィッドにとっては、恐怖-horrorなのである。そのhorrorは少年の存在意義を脅かすような類のものではなく、普段の生活に溶け込んだhorrorといえる。

"It was horrible but the horror was particular and familiar and distracted David from the formless dread that worked sticky and sore, within him..." (123)

「恐ろしかったが、その恐怖は独特で、毎度のことだった。そのおかげで、彼は心の中でじっくりと耐えがたいほどに、ちょうど治りかけのあまりにも大きな傷のようにうずいていた形をなさぬ恐怖にきづかずにすんだ」(岩本、1995)

このhorrorは得体の知れない本当の恐怖と相反する存在になり、真の恐怖から気を紛らわせてくれる役目を果たすのである。しかし、それは気を紛らわす程度の働きしか持たず、迫りくる真の恐怖を解消する機能は果たしていない。

最初の死の恐怖を少年は屋外の便所で遭遇する。便所に入ると彼は懐中電灯のレンズにぴったりととまる虫に注目する。蚊のような小さい虫でも光に当たると、レントゲン写真のように羽根や脚や心臓部分が映し出され、微かに鼓動をしている。はかない虫の生きているさまを観察するうちに少年は突然、墓場に閉じ込められる自分の死を想像してしまうのである。

"Without warning, David was visited by an exact vision of death.." (123)

「何の前ぶれもなしに、デイヴィッドは死の恐怖におそわれた」(岩本、1995)

二度目の死のイメージは自分自身に投影される。目をつむると彼自身が死んでいるのである。

"His own dying, in a specific bed in a specific room, specific walls mottled with wallpaper, the dry whistle of his breathing, the murmuring doctors, the nervous relatives going in and out, but for him no way out but down into the funnel. (128)

「彼自身の死。ある特定な部屋の特定なベッドの中、斑点のようなしみのついた壁紙を張った特定な壁、乾いた口笛のように鳴る自分の呼吸、小声で語りあう医師たち、落ち着かなく出たり入ったりする血縁の人々。だが、彼自身にはでるべき道はなく、ただひたすら煙突のような穴の中へ落ちこむだけ」(岩本、1995)

デイヴィッドは神が救ってくれることを願い手を空中に差し出す。神が握り返してくれたかどうか、不確かなうちに彼は手を戻していた。神の存在を確かめてきっぱりと拒絶されるよりも不確かなままにして、心が傷つかない状態を望んだからだと読み取れる。

A・サミュエルズ(1986)によると、心理学者であるC.G.ユングは、神イメージの現実性を心理学的に規定した。神イメージが指し示している者は、意識を超越する現実であり、注意を払わずには折れず、エネルギーを引き寄せる、とある。そして、この神イメージは全体性のイメージであり、「心のヒエラルキーにおいて、最高の価値、至高の調整権威として、神イメージは自己と直接的に結びつくか、または同一である」と述べた。この神イメージが崩れれば、自己も崩壊しかねない。神のイメージを追い求めた少年は、見つけられずに不安や死のイメージと遭遇する。1945年にユングは、「影」に直接的で明晰な定義を与えたとされている(A・サミュエルズ、1986)。影とはそうなりたいたいとい

う願望を抱くことのないもの、である。

人格の否定的側面、人間本性に備わる劣等で無価値な原始的側面、自分の中の「他者」、自分自身の暗い側面などがそれを指している。そしてユングは「われわれはみな影をもつこと、実態ある者は必ず影を持つこと、……影こそが我々を人間らしくさせること」を繰り返し強調したとされている。神のイメージを見定められない少年が持った、混沌とした不安は、ユングが述べる「影」であると考えられる。臨床心理学用語に「永遠の少年」という概念があるが、これは、ユングが提唱した理論、「元型」の一つで、「個性化過程における幼児元型」であり、「死と再生をつかさどる児童神で、瑞々しい身体と穢れない精神を持ち、その若々しいエネルギーと形態を永遠に保持している元型」（「臨床心理学用語の樹形図」より引用）である。しかし見方を変えれば、「すでに成人しているにも関わらず心理状態が思春期止まりの人間」（「ユング心理学の世界へようこそ」より引用）を指すともいえる。アップダイクは、少年から思春期にさしかかるところにいるデイヴィッドという少年を通して、神性と幼児性を併せ持つ「永遠の少年」のはかなさを描いていると解釈できないだろうか。そして、そのはかなさに鳩の死骸を重ね合わせたのではないかと考える。

ケルケゴールは、その著書、「不安の概念」の中で、「ほんとうに不安の詭弁に対して武装しうる唯一のものは信仰である」という神への帰依を強調している。不安は決して恐れる物ではなく、修行には欠かせないという概念を示している。「……教化される者は不安の元に立ち止まっており、不安の数知れぬ贖物によって惑わされることなく、過ぎ去ったことを注意深く記憶にとどめておく……」と不安を肯定的にとらえている。アップダイクも少年に、不安を与えることで信仰への道のに不安を与えることで、より確かな信仰心に至らせたのだと考える。

4. 神の啓示

不安と恐怖を抱いたまま、ある日曜の朝、珍しく母と一緒に散歩に出かけた際、母親から何か悩み事でもあるのか、と尋ねられる。この時点では彼は自分の思っている事を伝えない。少年は両親の持つ悩みが自分の持つ悩みよりも多く、複雑であると感じているので、自分の悩みでさらに悩ませることなど考えられなかった。

"Their confusion had flattered him into an illusion of strength; so now on this high clear ridge he jealously guarded the menace all around them, blowing like a breeze on his fingertips..."(130)

「二人の困りはてた顔つきを見ていると、むしろ彼の方が強い力を持つような気がいつもしていた」（岩本、1995）

自分にとっての救済がもたらされることを望みながら、自分よりも悩み多き「弱い」両親にその救済を求めることはしない。彼はドブソン牧師なら頼れるのではないかと感じその日の午後に予定されていた教会学校で、質疑応答の時間がくると、彼は、自分が死について抱えている恐怖を解消すべく次のように質問する。

"About the Resurrection of the Body – are we conscious between the time when we die and the Day of Judgment?" (132)

「あのう、肉体の復活のことに関係あるんですけどーぼくたちが死んで、神様の〈審判の日〉を未までの間、意識はあるのですか？」(岩本、1995)

これに対する牧師の応えはデイヴィッドをひどくがっかりさせる。だれも尋ねようともしない質問であった。教室には、最初、驚きのために静けさが訪れる。しかし、それがやがて笑いやざわめきになり、デイヴィッドの心をますます乱す。

"The sense grew, in the class, of a naughtiness occurring...The current running around the circle panicked David. Did everybody know something he didn't know? (132)

「クラスの中に、悪い悪戯がはじまるぞという雰囲気広がる..... その円周を電流のようなものが走り抜け、デイヴィッドはパニックを覚える。ぼくが知らないことをほかのみんなは知っているのだろうか？」(岩本、1995)

もちろん、クラスメートはデイヴィッドの質問の内容について話しているのではなく、「タブーの質問をしている」または、「牧師を困らせている」、ということの問題にしている。デイヴィッドの聞きたいこと、つまり、「死んだ後の魂の行方」など、だれも考えたことがないか、考えることをすでにあきらめていたかのどちらかなのである。キリスト教の教えは受けても、デイヴィッドほど、死について深く考えたり悩んだりする子どもは、そこには存在していなかった。先ほどの質問に牧師が、"No." と答えると次にデイヴィッドは、その間、肉体を離れた魂はどこにいるのか、と尋ねる。彼は牧師を困らせようとしているわけではなく、純粹にその質問に対する明快な答を牧師から聞いたかったのである。いつもの日曜の礼拝の時のような明快な答えを期待していたのに、牧師の述べたことは彼をひどくがっかりさせた。

"David, you might think of Heaven this way: as the way the goodness Abraham Lincoln did lives after him." (133)

「デイヴィッド、天国のことはこう考えてみたらいいかもしれんよーつまり、アブラハム・リンカーンの行った善は彼の死後もずっと生きているだろう。それが天国だと」(岩本、1995)

このような説明は、神の存在を確かめなかったデイヴィッドにとっては、全く役に立たない。誠意をもって尋ねたのにバカにされていると感じたデイヴィッドは涙をこぼしつつも反論をやめる。そして、牧師が、自分は彼の質問に十分答えているかどうかデイヴィッドに尋ねたところ、デイヴィッドは "Yes." と答える。そう答えた後、恥ずべきは、ドブソン牧師のほうなのに少年は自分が恥じ入っているを感じた。「偽者であるがための重荷や熱情」(134) (the burden and fever of being a fraud) を、自分が牧師と共に負っているように思えるとある。牧師の苦し紛れの言い訳に接して、納得するまで牧師と戦うことをせず、大人の言うことを受け止めてしまったことが本人にとっては全く不本意なことであったことが明らかとなる。

このように親や牧師に反発するというのは、神の存在を確認するために超えなければならない一つのイニシエーションであった。未熟な少年の若気の至りなどではなく、神と向き合うための一つの通過儀礼であるからこそ、プロテスタントとして最後まであきらめず牧師を追求しなくてはいけなかった。しかし、エマソンのように聖職者に立ち向かうことが少年にはできなかった。これがで

きずに少年は恥言ってしまうのである。

信頼していた牧師に裏切られたこと、キリスト教自体が否定されたことで少年の心は重かった。家に帰ると祖父が所有していたぼろぼろになった聖書を手に取る。その聖書に触れて祖父も深い悩みを持っていたのだらうと考える。なぜ聖書を読むことにしたのか。それまで彼は聖書を小道具—*apparatus of piety*と見なしていた。聖書を片手に敬虔そうに気取ることが大嫌いだったからだという。

母は聖書を読む息子に声をかけ、どんなことで悩んでいるのかを尋ねる。デイヴィッドは、牧師に言われたことをそのまま伝えた。どんなに母親もショックを受けるかと思ったのに、少年が母親に期待した反応は、得られることができなかった。死ぬという恐怖を抱える少年は子供らしい訴えを母に投げかける。

"..It's a question of dying and never moving or seeing or hearing anything ever again." (137)

「.....死ぬという問題なんだよ。ぜったいに動くことも、見ることも、何かを二度と聞くこともできないという問題なんだ」(岩本、1995)

すると母は、" ...darling, it's so greedy of you to want more." (137) 「それ以上を望むのは、あなたが少し欲張りなのよ」(岩本、1995) と答える。この*greedy*を、マタイによる福音書に基づいて述べていると考えられる。神がこんなにもあらゆる生物に勝る価値をあなたにあたえてくれたのに、寿命をこれ以上延ばそうとすることにどれだけの意義があるものか」ということを暗にデイヴィッドに伝えたかったのであろう。彼女の神についての考えは、デイヴィッドの自己救済を求める少年特有の利己主義的な考えと根本的に異なる。自らの魂の救済にとられる若いデイヴィッドは母の言葉に耳を傾ける余裕はない。死の恐怖におびえている少年は、死んだ後の魂の行方を知りたいのである。ここで、少年には悩みが一つ増えたことが明らかになる。それは母親を傷つけてしまったのではないかという心配である。理論的ではないと母を煙たく思うと同時に、愛する母を悲しませることは不本意なことなのである。自分の死後をひたすら心配する少年はエゴイスティックにもとれるが、そうではなく宗教的成長を求めつつ、家族や母親の気持ちを思いやる普通の少年として描かれている。

しかし心配は杞憂であった。母は毅然とした態度で、デイヴィッドに自分が大学で専攻した分野の本を手渡す。プラトンによる、「洞穴の寓話」である。

父親はいつも通り、なげやりな自虐的ともとれる冗談をとぼして、父親なりの慰め方をする。これはデイヴィッドの心を落ち着かせるの。

しかし、牧師にさえ突き放されたデイヴィッドの心には、両親の忠告も意味を持たない。この後、彼はたった一人で、死と戦うために砦を築く (*his fortress against death*) 必要がある、という結論にいたるのである。砦を築く道のは、孤独ではあったが表面上はそう装うことはなかった。学校では死ぬ運命であることを意識しない仲間たちと付き合い、そのうちの誰かに楽園に連れて行ってもらえることを期待したり、身の回りの宗教のシンボルや信仰の言葉、天使や悪魔の絵などに触れたりしながら、希望の可能性を見つけようとしていた。

"The sermon topics posted outside churches, the flip, hurried pieties of disc jockeys, the

cartoons in magazines showing angels or devils – on such scraps he kept alive the possibility of hope." (140)

「教会の外に張り出されている説教のテーマ、ディスクジョッキーが軽口で慌ただしくもらず信仰の言葉、天使や悪魔の絵を描いている雑誌の漫画—そのようなとるにたらぬものに、デイヴィッドは希望の可能性を常に見いだそうとしていた」(岩本、1995)

少年はひきこもったり、自分の殻にとじこもることなく(心の奥底では閉じこもっているのかもしれないが)ごく普通の生活が続けるも読書欲は失った。いつかのように、「死」を思わせる記述を見つけないとも限らないからである。同じく農場での生活を嫌う父親は、暗い灯りがとる自宅へ帰る時間を遅らせたり、週末さえも農場から逃れようとたくらんだりするが、破壊的な仕事となると、父は非常に暴力的に徹底的に行う。デイヴィッドはそんな父といつも行動を共にする。二人で破壊的な行為—古い鶏小屋を取り壊したり、灌木に火をつけて燃やしたりということには熱中するのである。何かを叫びながら一心に破壊する父の行為は、少年を不安にさせるどころか、見ているだけで exhilarating「気分を良くさせる」くらいなのである。この部分は、結末でデイヴィッド少年の内部で起こる大きな変化の伏線となっている。

15歳の誕生日に二十二口径レミントン連発銃というものが両親からデイヴィッドに贈られる。この銃こそ、上記に示した少年の内部で起こる変化を起こしてくれる媒体となるのである。

デイヴィッド少年が悩みふさぎこむ様子を見て心配した両親は、デイヴィッドに納屋の鳩を退治してもらえないかと頼む。デイヴィッドは他の選択肢を見つけられず、鳩退治をすると決める。そう決めた瞬間、

"...a pleasant crisp taste entered his mouth with the decision." (143)

「.....何か心地よい爽やかな気持ちが口の中にさっと広がった」(岩本、1995)

とさわやかな喜びに満たされる。破壊的な行動から再生を獲得する過程への第一歩が踏み出された瞬間である。

鳩退治を頼まれたデイヴィッドは気後れすることなく銃を持って納屋に入る。彼は淡々と引き金を引き、鳩を撃ち殺す。「仕方なく」撃ち殺すはずだったのに、必要以上に撃ちまくる姿に、殺生に対する罪悪感や戸惑いは見られない。それどころか、「存在価値のないちっぽけな鳩」がデイヴィッドに狙いを定められたとたんに、姿を立派に現し、開花すると考える。そのとき、少年は自分が創造主になったような気分さえなるというのである。死しても美しい鳩を見つめるうちに、少年は逆説的に自分の「生」を意識するのである。価値がないから死んでもいいのだ、という自分の行為の正当化に加え、攻撃しているうちにその対象に対する攻撃性と憎しみが増幅していく。これもユングのいうところの、「影」の部分であろう。

二番目に撃った鳩はちょうど穴にはさまったまま死んでいた。これが気に入らないため、死んでいる鳩にさらに銃撃を加える。このとき少年は3回目の具体的な死のイメージと遭遇する。その幻想は一瞬にして消え、はさまったままの鳩に何発も撃ち込む。完璧を目指して一心に撃ち続けるさまには狂気さえも感じられる。

鳩への攻撃が終わると、鳩の死骸をつぶさに観察しながら土に埋めていく。最後の鳩を投げ入れたとき、彼は自分にかぶさっていたから取り除かれるのを感じて、軽やかな気分になるのである。彼の内部に大きな変化が起きて、彼はあることを確信する。それは、

"God who had lavished such craft upon these worthless birds would not destroy His whole Creation by refusing to let David live forever." (150)

「益もない鳥に神様がこれほど凝った意匠を惜しげもなくついやされるのであれば、デイヴィッドの生命を死の世界に導き、自らの創造の天地をすべてうちこわされるはずがない、と彼は信じた」(岩本、1995)

ということである。これより以前、母エルシーが自分の世界観のもと、マタイによる福音書6:26-30に従って息子を「欲深い」とたしなめたことがあったが、この最後のセリフも同じマタイによる福音書の一節がもとになっているのではないかと考える。この中に出てくる、「野の花」と「鳩」を置き換えてみるとデイヴィッドの考えたことと、この福音書の内容は一致している。

ユングが定義した神イメージを最後に見いだしたことで、少年は救いを得た。この最後の彼のセリフに、デイヴィッドの内面にある神への信仰と現実の神の存在との折り合いをつけられたことが現れている。聖書や牧師、家族からも得られなかった啓示を、自分の力で見いだすことができた感動的瞬間である。いったん意図的に罪深い魂となったことで、この体験が可能になったという、Unconscious sinningが具現化されているといえよう。

この時代には、すでにアメリカに啓蒙主義の運動が入っていた。従来の神秘的な原罪説や予定説をすて、人間の無限の可能性を信じる合理主義が奉じられるようになる(亀井 1997)。イギリスの詩人William Wordsworthを中心とするロマンティシズムの詩人たちの特徴は、「人間の内部の感情をありのままの形で、飾らずに表現することにあつた」また、「彼にとっては人間もまた自然の一部であり、自然のざわめきや人間の感情が一体となって、独特の詩的世界を作り上げた」(「ウィリアム・ワーズワース：生涯と作品」より引用)。またWilliam Wordsworthは、「数学や自然科学の整然たる秩序に畏敬の念を持っていたようで、自然の中の花や動物、小鳥を歌う自然詩人は同時により硬い数学的科学思想にも共鳴した」という(「18,19世紀のイギリスの詩と近代科学」より引用)。William Wordsworthが自然科学と数学的科学思想に共鳴したように、少年も神が創造した鳩の美しさを目の当たりにして、情緒的な信仰と科学的な生命の成り立ちを結びつけることができ、最終的にはエマソンが述べるころの「神を見つけるのは自分自身」という目標を達成できたのである。

5. おわりに

デイヴィッド少年は、自己以外のものを殺すことで心を紛らわせ、死に対する恐怖から開放された。この少年が残忍であったり特異であったりするわけではなく、アメリカの普通の家庭で育つ、悩み多き少年であるにすぎない。冒頭で述べたとおり、エマソンが主張した信仰とは自らが見つけるもの、という概念を少年の体験を通して示された、きわめて宗教的な意味を持つビルディングズロマンである。宮本(1977)によると、第二次大戦後、戦争文学、南部アメリカを描いた南部文学がうまれたが、

それらの多くが現代生活からはかけ離れた素材が取り上げられているということである。そんな中、1950年代になると逆に日常性を前面に押し出した作品の中に、アメリカの姿を象徴的に把握しようとする試みが主流を占めるようになったという。宮本はその中心となったのが、ジョン・アップダイクであるとしている。このPigeon Feathersは、少年の宗教的体験を、アメリカの日常的生活のなかで鮮やかに描いた作品なのだと言えよう。

生活の一部を切り取ったような、リアリズムを代表する作品であるからこそ読者（特にアメリカの）の興味・関心を十分に惹きつける。少年デイヴィッドの、身の置き所を見つけられない孤独感・言い表せぬほど恐ろしい不安感が、確かな信仰心を得ることで霧散していくプロセスが描かれている点は、宗教国アメリカの読者にとって心地よい展開であろう。さらに、鳩を撃ち殺すことで宗教的体験を得られるというテーマは、日常生活と銃が切り離せない銃文化を生きるアメリカ国民にとってなじみ深く、共感を呼ぶのではないだろうか。しかし、何よりも、一人の少年の宗教への目覚めが、アメリカの平均的家族の喜怒哀楽と共に力強く書かれている点が、この作品がアメリカ文学史上に残る名短編として位置づけられている所以であると考えられる。

参考文献

- H. G. Wells (1920) *The Outline of History* London: George Newne.
- John Updike (1962) *Pigeon Feathers and Other Stories* Robbinsdale, MN: Fawcett Crest.
- A.サミュエルズ (1986) 『ユング心理学辞典』(山中康裕監修、濱野清志、垂谷茂弘訳) 東京：創元社。
- ケルケゴール (1979) 『不安の概念』(斎藤信治訳) 東京：岩波書店。
- ジョン・アップダイク (1995) 『ジョン・アップダイク自選短編集』(岩本巖訳) 東京：新潮社。
- ドストエフスキー (1866) 『罪と罰』(亀山郁夫訳) 光文社古典新訳文庫。
- トム・ウルフ (1979) 『ザ・ライト・スタッフ—七人の宇宙飛行士』(中野圭二、加藤弘和訳) 東京：中央公論社。
- ハワード・M. ハーパー (1969) 『絶望からの文学』(渥美昭夫、井上謙治訳) 東京：荒地出版社。
- ラルフ・ウォルドー・エマソン (1841) 『自己信頼』(伊東奈美子訳) 東京：海と月社。
- W.ジェイムズ (1969) 『宗教的経験の諸相』(榎田啓三郎訳) 岩波文庫。
- 池上 彰 (2009) 『そうだったのか！アメリカ』東京：集英社文庫
- 大江健三郎 (1985) 『小説のたくらみ、知の楽しみ』東京：新潮社。
- 沖永 宜司 (1997) 「禅経験と宗教経験」『禅文化研究所紀要』通号23 291-332。
- 亀井俊介 (1997) 『アメリカ文学史講義』東京：南雲堂。
- 鈴江瑋子 (2003) 『ジョン・アップダイク研究 初期作品を中心に』東京：開文社出版。
- 堀 雅彦 (2002) 「せめぎあう健やかな心と病める魂—『宗教的経験の諸相』におけるウィリアム・ジェイムズの歴史認識」『南山宗教文化研究所報』(12), 10-25。
- 宮本陽吉 (1977) 『アメリカ小説を読む』東京：集英社。
- 臨床心理学用語の樹形図 (最終閲覧日：2014年11月20日) <http://hermes321.com/>
- ユング心理学の世界へようこそ (最終閲覧日：2014年11月20日) <http://www.j-psycho.com/>
- 18,19世紀のイギリスの詩と近代科学 ～ニュートンのプリンキピアと光学の影響～ (最終閲覧日：2013年5月4日) <http://archive.today/ZOveK#selection-203.0-239.1>
- ウィリアム・ワーズワース：生涯と作品 (最終閲覧日：2014年11月20日) <http://poetry.hix05.com/Wordsworth/wordsworth00>

html

マタイによる福音書（最終閲覧日：2014年11月20日）

http://www.recoveryversion.jp/read_List.php